

国 語

一 次の文章をよく読んで、あとの各問に答えなさい。

苦しみや鬱ふさぎのなかに溺溺れてしまっているひとが、それでもそれについて語るためには自分の苦しみや鬱ふさぎについて、どんなきつかけ、どんな経過でこんな苦しみや鬱ふさぎに襲襲われることになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふうに、苦しみや鬱ふさぎから身を引き剥はがし、ことがらを時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。このように自分の苦しみや鬱ふさぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということがここではとりわけ重要なのである。つまり、苦しみや鬱ふさぎを当初あったとは別の地平へと移し変えるところに、他者を前におのれについて語るこの意味はある。語るということは、相手に回答をもらうということではない。見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもらうことであるのだ。

が、鏡であるべき聴く者は、話の自身が重いし、しかも相手からなかなか言葉が漏れてこないで、その緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまう。そのうち待ちきれなくなつて、「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの？」と①誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口について乗ってしまふ。「わかつてもらえた」、と。が、これはじつはもつともまづい聴き方なのだ。なぜなら、語るこの意味は、語ることによってみずからの*閉塞閉塞から距離をとることにあるのに、そのチャンス聴く側が横取りしてしまうからだ。これでは聴くことにならない。

だれかに聴いてもらおうとひとが重い口を開くのは、何を言っても受け容れてもらえない、②留保をつけずに、反論もせずに、とにかく言葉を受けとってくれる、自分がそのまま受け容れてもらえる、そういう感触を確認できたときである。このとき、相手に見守られている、自分が相手の関心の宛て先になつていふことが大きな力になる。関心をもつひと、じつと待つてくれるひとの前ではじめて、ひとの口を開くのである。西洋のひとたちが関心のことをインタレストと呼ぶことには*含蓄含蓄がある。インタレストという語は、ラテン語の *inter-esse*、つまり③相互的な存在であるということ (inter-being) からきているのだ。

歯科医院でよく、④絵本を読んでとせがんでいる幼児を見かける。お母さんが読みはじめても、子どもの気は余所へ行っている。読み終えたらすぐにまた「もう一回」とおねだりする。けれども他の子どもがどんなオモチャをもっているか、どんな遊びをしているかが気になつて、話ほろくに聴いていない。なのに何度も「読んで、読んで」とくり返す。ここでは、話の自身より、母親の声が自分のほうへ向いていることの確認が大事なだろう。物語の筋よりも、自分が母親に語りかけられているという状況、つまりは自分の存在がだれかの意識の宛て先になつていふことが、子どもにとって何より重要なのだろう。

「時間がないので子どもの話をじっくり聴いてあげられない」と言うひとがいる。でも聴くことは片手間でもできる。ここは仕事をする時間、ここは料理をする時間、ここは家族で団欒だんらんの時間と区切らなくても、料理を作りながら、何かをしながら耳だけちよつとそちらに傾けて聴くということもできる。というかむしろ、ちゃんと聴いていないのかというほうが、話すほうも話しやすい。真剣に聴かないほうがきちんと聴ける。日々の会話では、気が抜けた雑談のなかから何か生まれるなどということもよくある。だからといっていい加減に聴いていけばいいというわけでもなく、このひとはいま自分のためにここにおいてくれるという感触があればいい。あなたのために早く帰ってきた、ほんの少しだけでもここにいて、この時間はあなたのためにとってあると時間をプレゼントする。そういうことは、子どもは感じ取れる。そしてそういう関係さえあれば、子どもの口から言葉はおのずから漏れてくる。

聴くことのプロは、⑤あえて聴かないことも聴くことの一つとよく心得ている。臨床心理学者の河合隼雄はがいゆんごさんは、かつて相手の口を開かせるコツとして、こんなことを*推奨推奨していた。「ほう」と切り返すこと、河合さんの言葉で言えば「感心する才能」である。わたしはあなたに関心があるという信号をくり返し送るということである。

⑥接客業のプロは、受けとめること、認めることだけが聴くことではないことを熟知している。たとえば憎まれ口を叩く、わざとつれなくする、思いとは逆のことを言う、聞こえていないふりをするなどして、相手を突き放す。あるいは、聞き流す、聴かなかつたことにする、逸えらす、とりあわないなどして、相手をはぐらかす。もちろんこんこんと論ろんしたり説教したりすることもある。そんな*緩急緩急や押し引きをよく心得ている。

いずれにせよ、聴くときに大事なものは、最後までつきあうことだ。をあげる』ということだ。語る／聴くという関係のなかでは、「ふれあい」よりも、すれや*齟齬そご、すれ違いのほうが*顕在化顕在化してしまう。が、このぎすぎすした関係を何度も経験することこそが大切なのだ。こういう試行錯誤試行錯誤のくり返しの果てにしか、ほんとうの意味で、語る／聴くという関係は生まれてこない。語りは信頼を前提とするが、信頼は言葉の積み重ね積み重ねのなかでしか生まれてこないからである。そういう言葉のやりとりにかける時間を、ひとびとはなぜか惜おぼしむようになっていふ。

⑦聴くことにも専門家が生まれたというのには、ちよつと危あやしい状況である。ついこのあいだまでは、聴くプロがいらない代わりに町のなかに聞き役がいた。ひとびとはたがいに自然に聞き役になりあつてた。いまは、たがいに他人の家のことには踏み込まないようになって、聞き役もいなくなつた。だから聴くプロも登場してくるのだが、聴くプロがいるとひととはますます他人の話など聴かなくなる。子どもの鬱ふさぎをみずから聴く前に、すぐに「カウンセリングを受けてみる？」と訊く。そういう悪循環がどんどん進行しているように見える。

言葉というのは不思議なもので、交わせば交わすほどたがいの違いが際立ってくる。たがいに理解しあうということ、相手のことをわかるといふことは、相手と同じ気持ちになることだと思つていふひとが多い。A それは理解ではなく合唱みたいなものであつて、同じものを見ていても感じることもこんなにも違うのかというふうには、違いを思い知らされること、ほんとうの意味での理解ではないかと思ふ。

以前、友人の家族と会ったとき、母親が自分の息子を指さして、「この子とは性が合いませんねん」と言った。このお母さんは素敵だなど思った。ひとには言ってもわからないことがある、それを知ったうえでそれでもいいしよにいる。わからなくてもたがいの信頼が揺るがないことを肌で感じている……。性が合わなくてもいい、いやむしろ合わなくて当然なのだ。

「納得」という言葉がある。「納得」というのは不思議な心持ちで、「あなたの言うことはわかるけど、納得できない」と、わたしたちはしばしば口にする。逆に、「あなたの言っていることはわたしには*肯うことはできないけれど、でも納得はできる」とか「事はそれで解決したわけではないけれど、納得はした」と口にすることもある。

このように、「納得」にはどうも、事態の理解、事態の解決には尽きないものが含まれているようだ。B、わかってもらいたいと願って口を開いたひとが、「わかる、わかる」と相手にすらすら言葉を返されると、「そんなにかんたんにわかれてたまるか」と、逆に頑

(中略)

聴くというの、話を聴くというより、話そうとして話さなければならないその*疼きを聴くということだ。C、聴き手の聴く姿勢を察知してはじめてひとは口を開く。そのときはもう、聴いてもらえるだけでいいのであって、理解は起こらなくていい。妙にわかれたら逆に腹が立つというものだ。

こうして一つ、たしかなことが見えてくる。他者の理解とは、⑧他者と一つの考えを共有する、あるいは他者と同じ気持ちになることではないということだ。D、苦しい問題が発生しているまさにその場所にも同居合わせ、そこから逃げないということだ。

こういう交わりにおいて、言葉を果てしなく交わすなかで、同じ気持ちになるどころか、逆に両者の差異がさまざまな微細な点で際立ってくる。「ああ、このひとはこういうときこんなふうを感じ、こんなふうに感うのか」と、細部において、ますます自分との違いを思い知ることになる。それが他者を理解するということなのである。そして差異を思い知らされつつ、それでも相手をもっと理解しようとしてその場に居つづけること、そこにはじめて⑨ほんとうのコミュニケーションが生まれるのではないかと思う。このことはもっと大きな社会的次元においても、つまり現代社会の*多文化化のなかで起こるさまざまな*葛藤や衝突のなかでも、同じように言えるはずだ。

(鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい?—臨床哲学講座』ちくま新書)

《語注》

- *1 鬱ぎ…気持ちが悪く落ち込んで晴れないこと。
- *2 閉塞…閉ざされてふさがれること。
- *3 含蓄…深い意味を内に蔵すること。
- *4 推奨…優れた点をほめて人にすすめること。
- *5 緩急…ゆるやかなことと厳しいこと。
- *6 齟齬…くいちがひ。
- *7 顕在化…はつきりあらわれて存在すること。
- *8 肯う…同意する。承認する。
- *9 疼き…心が痛いように感じること。
- *10 多文化化…さまざまな人種民族などが、独自性を保ちながら、他者のそれも積極的に認め、共存していこうとすること。
- *11 葛藤…それぞれ違った方向の力があつて、その選択に迷う状態。

問一 — 線部①「誘い水を向ける」の意味として、適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、相手がこちらが望む行動をするようにさそいかける。
- イ、それとはなしに相手の関心をこちらへ向けさせる。
- ウ、言葉たくみに誘って、人がよくないことをするように仕向ける。
- エ、盛んにほめて相手に自信を持たせ、やる気にさせる。
- オ、間違いが無いように相手に言葉をかけて確かめる。

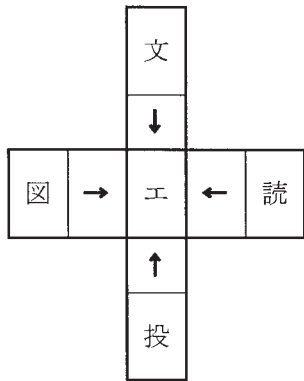
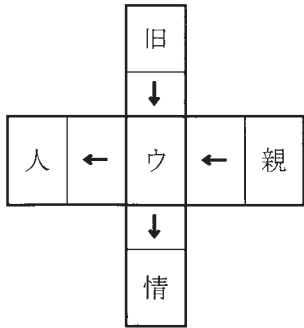
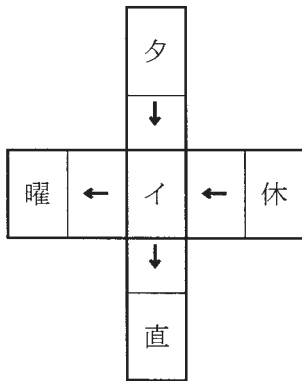
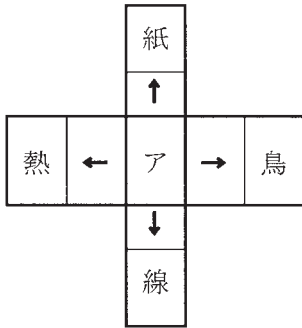
問二 — 線部②「留保をつけずに」とありますが、この場合の「留保」とはどのようなことですか。次のア～オの中から適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア、相手の意見を聴くより前に、まず自分の意見を言うておくこと。
- イ、自分の主張を通すために、とりあえず相手の話に耳を傾けること。
- ウ、相手の話をそのまま受け容れずに、いったんとどめておくこと。
- エ、自分の立場を守るため、話の一部しか聴こうとしないこと。
- オ、相手の主張をいかげんに聞いて、そのままにしておくこと。

二 言葉に関する問題 次の各問に答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 矢印の方向に読むと、漢字二字の熟語ができます。ア、エに当てはまる漢字を答えなさい。



問二 次の()に入る適切な漢字をア、オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| ① 予定を()える必要がある。 | 「ア 代 イ 換 ウ 買 エ 替 オ 変」 |
| ② このごろは()品ばかりで個性的な商品がない。 | 「ア 規正 イ 規制 ウ 既製 エ 既成 オ 規整」 |
| ③ それは調査()の書類だ。 | 「ア 大勝 イ 対照 ウ 対称 エ 対象 オ 大正」 |
| ④ ()を肥やした役人は逮捕された。 | 「ア 私腹 イ 私服 ウ 至福 エ 紙幅 オ 雌伏」 |

問三 次の四字熟語の()に入る数字を使って計算をし、
 ア〜エに当てはまる数字を答えなさい。

() 里霧中 × 危機 () 髪 × () 寒四温 =

四 () 時中 × 朝三暮 () + 千載 () 遇 =

() 変万化 ÷ () 鬼夜行 × 一石 () 鳥 =

二人 () 脚 + 十人 () 色 - () 転八倒 =

問四 ことわざ、慣用句として正しい表現を次のア〜オの中から一つずつ
 選び、記号で答えなさい。

- ① ア 年寄りの行水 イ 年寄りの冷や水 ウ 年寄りの力持ち
- エ 年寄りの一声 オ 年寄りの耳に念仏
- ② ア 雀の顔も三度 イ 雀のたましい百まで
- ウ 雀の嫁入り エ 雀百まで踊り忘れず
- オ 獲らぬ雀の皮算用
- ③ ア 花が恥じらう イ 両手にも花 ウ 言わぬが花
- エ 花が曲がる オ 花も身もある
- ④ ア 火ぶたを切る イ 火に湯を注ぐ
- ウ 頭から火が出る エ 火を見るように明らかだ
- オ つめで火をともし

C 文法に関する問題

問五 次の(Ⅰ)群〜(Ⅳ)群の言葉を使って文を作る時、不要になるものをそれぞれ二つずつ選び、記号で答えなさい。

(Ⅰ) 群

- ア、家族と イ、昨年ウ、初めて エ、来る オ、私は
- カ、九十九里浜へ キ、夏に ク、ずっと ケ、行った コ、海水浴に

(Ⅱ) 群

- ア、遊んだ イ、ほとんど ウ、妹が エ、そびえていた オ、目立つ
- カ、境内には キ、いっしょに ク、遠くからでも ケ、杉の コ、私と
- サ、置いた シ、神社の ス、よく セ、巨木が

(Ⅲ) 群

- ア、近くの イ、作ったり ウ、そりなどを エ、家族は オ、行き
- カ、めったに キ、スキーや ク、したりします ケ、冬に コ、雪山で
- サ、助けたり シ、家に ス、私の セ、毎年 ソ、いとこの
- タ、なると チ、雪だるまを

(IV) 群

ア、昔の イ、あつかったと ウ、害虫を エ、以前 オ、初めての
カ、祖母から キ、食べる ク、益鳥と ケ、稲の コ、聞いた
サ、人たちは シ、ことがある ス、田んぼに セ、考えて ソ、ツバメを
タ、私は チ、大事に